



平和学習② 特攻はなぜ行われたのか

2月5日（水）の総合では平和学習として「なぜ特攻は行われたのか」を中心に学びました。

特攻作戦は、戦時中のどの時期に、どこを中心に行われたのかといった概要を知りました。また、知覧平和会館に展示されている手紙や、知覧で軍指定食堂だった富屋食堂でのお話、前回学習した浜園さんのように作戦に参加しながらも生還した方々のお話をインタビュー映像で見ました。それぞれの立場に思いがあり、皆が理不尽な作戦を受け入れなければならなかった時代の怖さを少しでも感じてほしいと思います。実際に鹿児島島に行くまでに、色々と学ぶことで、見えるものも変わってくるかもしれません。皆さんの平和学習の感想をご紹介します。

1 組

- 戦争にもたくさんの戦法などがあるけれど命を軽視した特攻が、有効な戦法と信じられていたことにとっても恐怖を感じました。そんな中で生還することすら許されない社会の風潮や洗脳のように情報を扱って美化するようなことが、たった75年前当たり前だったことが未だにうまく信じられません。特攻隊員の方々は、どんどんと戦況が悪化する中で、それでも戦争の中に身を投じたのだと思うととても心が痛みました。私たちが当たり前に今、手にする平和や正しい情報は本当に恵まれていると改めて思いました。
- 特攻作戦の生みの親も最初は戦争が終わるだろうと思って言ったひと言だったのに、最終手段としてその戦い方が実行されたと知り心苦しく思いました。国の為だと、ちかって特攻に出たのに、航空機の故障で事故死となってしまった人もいるといい、びっくりしました。特攻に、行く前に取った写真が笑顔だったのは遺影用だということが分って、無理やり笑っていたのだと思いました。特攻に行くと死なないといけなし、エンジンのトラブルや爆弾を落として帰ってきたとしても、「なぜ、帰ってくる」とせめられていたのは、ありえないと思いました。
- 私は、今回の動画でも前回の動画でも気になったことが一つあって、それは特攻隊で出げきして奇跡的に帰ってきた人に「次は死んでこい」とか「なんで帰ってきた」とか、特攻隊の恥さらしなどの言葉をあびせていたことです。特攻をしている人も、命令している人も、同じ命をもっている。なのに、特攻隊は一度行くと帰ってきてはいけないうかが不思議でしかたありませんでした。実際に特攻に行った人が残した言葉に、「このままの日本が勝てるはずがない」というものがあって実際に行く人だからわかったことなんだろうなと思いました。私は鹿児島島に行って、「特攻」について、もっと、もっと深く学べるといいなと思いました。



2組

- 今回の平和学習では、特攻隊について知ることができました。モールス信号でこれから敵艦に突入する音が心に残りました。他にも特攻に行く人達の年齢が若い人達ばかりで、終戦後の日本の人口のグラフを見た時 10代～20代の所だけが結構少なくてびっくりしました。戦争というものはたくさんの人の命がなくなり本当に恐ろしいものだと感じました。
- 前よりも深く「特攻」について知ることができました。皆「特攻は神」と思っていたと知り、そこまでして特攻へ行くのはすごいことだと分かりました。子犬をだいている写真では、あと2時間しかないという中楽しそうにしているのが見ていて少し悲しくなりました。戦争を止めるチャンスがあったならそこでやめてほしかったとすごく思いました。その時やめていれば特攻もなく、3848人は死ぬことがなかったんじゃないかなと思いました。現代では思いつかないことばかりやっていたこの時代に、従うしかできなかった若者しかいなかったことがなによりもショックでした。
- 「特攻」という大きなイメージしかなかったけどたくさんの人の思いや考えがあって本当になんて特攻なんてしたんだろう、戦争なんてしたんだろうと思いました。特攻に行っても生きて何回も帰ってくる人や密かに反対意見をのこしていたりした人がいて驚いたし、すごいと思いました。戦争は多くの人的人生も狂わせる恐ろしいものだ改めて思いました。
- 何回か戦争の話やビデオを見てきたけど、今回の特攻隊のビデオを見て、本当に昔こんなことをしていたんだと改めてわかりました。命令を出されて死んでしまった人たちの手紙や写真を見て、とても怖いし悲しかったんだろうと思いました。昔は家族や友達が戦争で死んでしまっていたけど、昨日までしゃべったりしていた人がとつぜん死んでしまうなんて今では考えられないと思いました。
- やっぱり最初に思うのは「戦争をしても何の意味もない、なぜするのか」だろうと思います。昔、権力主義だった国も戦争に挑んで滅亡しおり、それにより人の命が何百人と失われことももっと深く受け止めてほしいです。そして、特攻は「勝つための最善の策」とか言って、人が必ず死ぬ策で本当にいけない方法だったと思います。しかも、20代くらいの人々が特攻隊員になっていたのでもわすか20年しか生きることができなかった人生がとても悲しいです。特攻も戦争もなければ、その人々はあと何年も生きることができていたので、やはり戦争は駄目だと思います。
- 特攻に行く人たちは写真では笑顔だけど本当は不安な気持ちでいっぱいだったと思います。さらに、皆負けることが分かっているのに、命令で特攻隊として行かねばならないのはとても悔しかったらうと感じます。日本が負けると分かっていたなら、その時にやめていればもっと色んな人の命は今も途切れていなかったと思うと、戦争というものは絶対してはいいないものだと思います。



• 今日、平和学習での特攻隊の話をきき、思ったことは、まず特攻隊で、行くか行かないかと聞かれるとき『強制ではない』としていても、行かないといけなくなっている社会が怖いと思いました。このような社会に二度となってはいけないと思いました。また、佐々木友次さんは「生きて帰る」とその時代では言えないような発言をしていて、とても勇気のある方だと思いました。特攻隊のようなことは二度としてはいけないと思いました。

• 特攻は本当に怖いはずなのに、特攻隊の人達はすごいと思いました。特攻隊員の人達は神が泣いてはいけないと思いつつ笑顔でいることは本当にすごいと思いました。特攻に行く人達は「生きて帰る」とあまり言わない人ばかりだったのに、

「生きて帰る」と言って特攻に行き本当に生きて帰れて、何度も出撃命令が出ても、9 回中 9 回帰ってこられるのは奇跡なんだと思います。

- 行きたくないところに行ってすごく悲しい思いが伝わってきました。この動画を見て、戦争でどんな風に人が亡くなっていったのか、どんな悲しいことがあったかなど色々なことを学ぶことができました。特に心に残っているのは遺書です。今から死に行くのにやさしくはげますようなことが書かれていて、すごく残こくだなと思いました。このようなことが二度とあってはいけません。鹿児島でしっかりと戦争のことを学べます。

3 組

- ビデオで見た時代は、今ではありえないようなことで亡くなってしまったと改めて知って悲しいし、怖いなと思いました。特攻の方たちは死ぬことを覚悟して死ぬために行くなんて想像できないくらい辛いと思いました。アメリカ兵の人からみても、特攻隊は自殺攻撃とよばれたり、恐れられていたと知り特攻隊はおそろしいものだとも再認識しました。
- 「お前はなぜ死なないのだ」この言葉を聞いて心が痛みました。今考えると生きて帰ってきただけでせめられる。とてもおそろしい世の中だったと感じました。お国のために命をささげた人がいるからこそ今の平和があると思うと、改めて戦争は二度と起こしてはいけないと思いました。
- 今回の平和学習で学んだ「十死零生」という特隊に使われた言葉は、特攻が死を前提に作られた作戦であることがわかる言葉と聞いて本当に、その通りだなと思いました。なぜなら、沖縄の特攻に行かれた方々は体に爆弾を何十個も身に付けていたからです。地下壕電信司令室のモールス信号の音を聞いたときに音が変わり、音が途切れたのと共に命が途切れる瞬間を聞いて、とても言葉が出てきませんでした。また、このような人の命を簡単になくしてしまう戦争は、とても恐しく感じました。
- 特攻というのはとても残酷なものだと思いました。日本が戦争で負けたということの本当の意味は言葉より、ずっと重いものだと感じました。神風特別攻撃隊の攻撃がもし失敗していたら、特攻なんてやめてもっと早く戦争が終わったのかもしれないと思い、切なくなりました。特攻に行った人 1 人 1 人に、それぞれの想いと人生があって、それが一言の命令でなくなってしまうのが辛かったです。今ある平和を守っていかなくてはいけないと思いました。
- 前回に加えて特攻隊について知り、すべての人がお国のためにと考えているわけじゃないんだなと思いました。なかには 17 歳の方などがいてとても心が痛かったです。地下壕電信司令室でのモールス信号の音を聞いたとき衝撃が強く言葉が出ませんでした。とても恐ろしく、これは死ぬまでのカウントダウンだなと思いました。特攻隊の方の写真での笑顔の裏には数々の思いがあったんだと感じました。
- 「指令していた上官たちは、誰も特攻へ行っていないのに、自分たちは行かなければいけない」という言葉を聞いて理不尽に思いました。そして、行って帰ってくることができると、嫌味を言われて、今ではおかしいと考えられるようなことも戦争中はあって、悲しいと思いました。戦争へ行った全員が志願ではなかったと思うと、辛くて厳しい世の中だったんだと感じました。「死ぬ」ための特攻があって、その頃の人たちも早く終わってほしいと思っていたんだと思いました。
- 必死に生きて帰って来たのに「死ね」って、今の自分には考えられません。勝つのが目的で撃沈するのが目的なはずなのに、死ぬのが目的と聞いて、普段今の私たちから「死ね」という言葉が出ますが、簡単に言えるような言葉じゃないなと改めて実感しました。写真は笑顔だけどその裏は…と考えると、言葉が選べないです。

4組

- 私は今日の特攻についての勉強をするまえまで、多くの人が亡くなったと習ったから、きっと戦時中の大半は特攻作戦を行っていたのだろう、と思っていました。でも実際は、戦争末期の約10ヶ月という短い期間で3848人の大切な命が奪われていたと知り、特攻作戦がいかに無謀な作戦だったかが改めて分かりました。また、とくに衝撃的だったのは「モールス信号が途切れたときは、命が途切れたとき」という言葉です。このモールス信号を受け取る地下壕電信司令室の方達はどのような気持ちで音が途切れる時間を聞いていたのかと思うと、とても心が痛みました。
- 戦争をどれだけ知っても良い事とは絶対に言えないなと思いました。「自分の命よりもお国のために」というのは、自分の意志ではない人がいるというのが分かりました。言いたい事が言えない世の中、したい事ができない世の中にはこれからはずっととなってほしくないなと思います。戦争をしていなければ生きている人がたくさんいると思うと、とても嫌な気持ちになりました。こんなことを繰り返してほしくないです。
- 特攻を生み出した人は本当にそれが最高の考えだと思っていなかったと知りました。だけど、上手くいってしまっていたのがダメだったのか、まず提案したのがダメだったのか、日本が「特攻」という戦い方に染まってしまったのが悲しいと思いました。そして、偉い人の声はすぐに日本に反映されるのに辛い思いで戦いに向かう人達の声は否定されて、今の時代に残るものも少ない現実も悲惨だと思います。その中でも少しでも残ったその頃の人々の思いを精一杯受けとめていくことが大切だと思いました。
- 特攻に行った人にも、色々な事情があり、想いがあったんだと思いました。特攻に志願して行った、笑顔で喜んでいったというのは本当のことではないんだと思いました。「お国のため」と言ってもやっぱり死ぬために体に爆弾をつけていくのは怖いと思いました。戦争に行く前は、誰かに話したくても、遺書に本音を書くことができない世の中だったと分かりました。特攻隊の人にもそれぞれ大切なものがあってそれに支えられて最後まで生きたんだなと思いました。
- 私は、小学校で広島のこととか色々なことを習いました。今（戦争を体験して）生きている人もいて、それを伝えるのは苦しいかもしれないけれど、私たちは戦争を経験していないから分からないのでもっと悲しい過去について知りたいと思いました。今こうして、平和に生きているのは、日本が負けたからで、ほかの国に勝っていたらまた戦争をしていたような気がします。国のためだからといって戦争に行った人も、やっぱり死ぬのは怖かったり、自分の家族とか心配だった人も中にはいると思います。私は、戦争をすることは間違っているなと思いました。
- 改めて特攻がひどい作戦だったのかを知れた。「十死零生」という言葉があるように、特攻に行った人は、ほとんど生きて帰ってこられない。とてもひどい話だ。ほぼ全てのパイロットがそう思っていたと思う。モールス信号は、音と命が同じになっている。音が消えれば命も消える。音を聞いている人も怖かったと思う。特におかしいと思うのは、特攻を考えた人はなぜ特攻へ行かないのか。戦争はとても悲惨な戦いだ。
- 前回も特攻の話を見たけど、今回はその特攻について詳しいものの話で、いろいろ再現じゃなく実際の映像が写されていた。モールス信号とかは「ツー」という音が切れたら命も切れるということを知って、実際にそのシーンを頭で思い浮かべて心が痛くなった。この平和学習で、やっぱり戦争は怖いし、するものではないということが改めてわかった。